

〈招待論文〉 [研究論文]

日本語副助詞と世界知識

加藤 重 広

北海道大学

The purpose of this paper is to propose a new framework of topic markers and their contexts, examining the Japanese topic marker “*wa*” and its pragmatic function. As a topic marker, it is also attached to a phrase which is regarded as known objects or events, in addition to definitely known referents. It also marks a focused phrase, which is triggered in the world knowledge or linguistic knowledge of the speaker. This property of “*wa*” facilitates a multi-focus construction in Japanese, whereas “*mo*” cannot.

キーワード： 副助詞、世界知識、トリガード標識、文脈逆成、多焦点

本論は「は」をはじめとする日本語の副助詞が文脈にかかわる処理操作の標識としての機能を有することを、特に知識文脈の主体をなす世界知識の処理の観点から論じるものである。扱われる現象は一見文法論であるが、推論や文脈といった語用論的知見や手法を用いて分析する統語語用論（加藤 2016b）のテーマとして論じる。古くは、Li and Thompson (1976) などで日本語は、主題と主語の両方の標識を持つ言語に分類されているが、「は」が主題で「が」が主語と単純に考えることもできず、両者が融合すると「は」だけになるという点では主題優位と言えるが、そもそもそれが主題だとする基準も明確ではない。

1. 本論のテーマと予備的議論

本論では、加藤 (2017b) に従い、「とりたて詞」「取り立て助詞」などではなく、通例その名称のもとに区分されるもののほとんどを「副助詞」に含め、以下、副助詞と呼ぶ。例えば、「取り立てる」という複合動詞はその意味を考えれば to focus の意に相当すると考えられることから、焦点化する機能を有するかのよう誤解してしまう可能性があるが、

提題のハなどは前提にあたる要素として題目を導入することがあり、これは焦点ではない。もちろん、焦点化に相当する機能を持つことはあるが、とりたて詞が一律にそのような機能を持つわけではない以上、誤解を招きかねない名称であることは明らかだ。そのほかの事情は加藤 (2017b) にあるとおりである。

本論では主に提題・対照の副助詞とされる「は」を世界知識の活性化と関連づけて論じる。

1.1. 焦点をめぐる錯綜

焦点をめぐる錯綜の実質は前提をめぐる錯綜と考えるのがわかりやすい。日本語で言う「前提」は、①結論に対する前提 (premise) と、②動的解釈として設定される前提 (pre-supposition)、それに③日常の言語使用で用いる非専門用語 (おおむね事前了解事項あるいは事前了解的な必要条件) などが混在している (加藤 2012)。専門用語でないもの (③) はまず除外し、関連性理論で推意を前提推意 (implicated premise) と帰結推意 (implicated conclusion) にわけていること (Sperber and Wilson 1995²) を踏まえた上で、①も除外しておく (他に Huang 2014² また加藤 2020 予定も参照)。②で用いられる「前提」を加藤 (2012) では、(A) 文法論における前提と (B) 語用論における前提とにわけている。おおむね前者は、文の情報構造における前提で「焦点」でない部分がこれに相当すると見れば、文内部的 (intra-sentential) に規定されるものである。後者は、当該の発話あるいは命題に対して想定され、命題形式で表されるものであり、命題間的 (inter-prepositional) なものと考えられる。これは一見すると、形式的な区分のようであるが、必ずしもそう単純化できないところもある。

文法論における文内部的な前提 (…② (A)) とは、下記の (1) の下線部がこの例に相当する。(1) の「太郎」は、通常、既知と解され、これ以外の「さっきバナナを食べた」が情報伝達上の焦点となる。このとき「太郎は」は題目・主題と解され、「は」は提題の機能を持つと説明される。これは、国文法での一般的な扱いであり、「は」の分類カテゴリーを問わず、あまり変わることがない。つまり、提題の標示を受ければ、それは既知であり、非焦点、すなわち前提と扱われる。

(1) 太郎はさっきバナナを食べた。

多くの場合「は」に関する記述は、ここで一旦終わり、これ以上のことが議論されることはない。(1) を発する人物は、「太郎」を知らずに (1) を発することは通例考えがたく、直前まで知らなかった人物であれば「太郎という人は」というだろうが、この場合ですら、「太郎という人」をまず主題とする対象と認めて、それに焦点となる情報を陳述している。既知は、どの程度対象を知っているか (=対象に関する情報量) やどれくらい前からその対象を知っているか (=対象の記憶領域への収蔵時間) によって機械的に決まるわ

けではなく、発話者が既知と見なしていればよい。そして、「は」が既知につくのは、それを発話者が既知と見なしているからであり、「は」がつけば既知である。しかし、これは循環定義である。

(2) 次郎はさっきバナナを食べなかった。太郎はさっきバナナを食べた。

上の(2)では、「次郎」と「太郎」は既知のように見えるが、それぞれを「この男性」「あの男性」や「黒いジャケットの男」「白いセーターの男」のようにしても「は」で標示することはできる。先行文脈に現れておらず、知り合いでなくても、名前すら知らなくても、存在を認識して識別できていれば成立する。この種のを既知と扱うと、既知は「既知と扱われているもの」としか定義できず、既知という規定はあまり意味を持たなくなる。

国文法では、(2)の「次郎」と「太郎」は対照 (contrast) であり、情報伝達上の注目点となる。「さっきバナナを食べなかった」という陳述部は新出なので焦点と扱うことができるが、第二文の「さっきバナナを食べた」は既出情報であり、その意味では「既知」である。否定でなく肯定であることは未知としてもよいが、第二文においては肯定であること以外はすべて前提と考えることもできる。国文法では、対照は主題とは区別され、別の用法と見なされる。しかし、「対照」と「主題」は相互に排他的概念ではない。そもそも(2)における「次郎」と「太郎」もそれぞれの文において主題として扱われていると見ることができる。

ここで Lambrecht (1994) が Bolinger (1961) に言及しながら、対照性とはスカラー的概念だと述べていることを引くまでもなく、「主題性」と「対照性」が非連動の連続的概念だと考えて、整理する方法を導入することは相応の合理性を持っている。ただ、排他的分布の廃止とスカラー概念を同時に整理すると混乱するので、整理の手順に工夫を要することを踏まえ、ここでは表1のような区分を立てる。

		主題性	
		+	-
対照性	+	①対照的主题	②対照用法(非主题)
	-	③主题(非対照)	

表1：主題と対照による二値的区分

主題は1命題(1つの主節)に1つまでしか存在できないが、(1)は対照性のない主題③であり、(2)や(3)の「太郎」と「次郎」は①対照的主题である。(4)では、「太郎」が③主題(非対称)で、「バナナ」と「グレープフルーツ」が②対照(非主题)と見ることができる。

(3) 太郎は論文を書いたが、次郎は論文を書かなかった。

(4) 太郎はバナナは好きだが、グレープフルーツは嫌いだ。

問題になるのは、境界値を強調する用法（数量表現について、肯定文で最低限、否定文で最大限を表す）であるが、このとき、境界値は新情報であり、焦点になっているので、②に含め、下位分類において、区別する方法を考える。

(5) 花子は毎日コーヒーを5杯は飲む。

以上のように扱えば、主題性と対照性について、いずれかを持つものといずれも持つもののみを設定し、いずれも持たないものは設定せず、①～③の3種類に分類できる。しかし、このやり方では対照性と主題性をスカラーとして連続的だとするのではなく、整理の便宜上離散的なものとして処理している。連続的なものとして処理するには、+と-を大小あるいは強弱のような尺度として記述することが必要になる。この点は、2節以降で再度扱う。

1.2. 世界知識なるもの

本論では、形式文脈や世界知識における文脈的情報の処理が対照性を成立させると考えるので、あらかじめ枠組みとなる考え方（「演繹的文脈論」と呼ぶ）を本節で簡単にまとめておく（加藤 2008, 2009, 2011, 2106a, 2017aなどを参照）。

演繹的文脈論の枠組みでは、記憶種別を①処理記憶、②談話記憶、③知識記憶に分け、記憶種別の関わりを一つの指標として文脈を規定する。処理記憶は、言語音の塊を音韻・形態・統語・意味などのレベルで分節し、処理する領域で、②③の情報に基づいて再分析・再処理しない限り、語用論的な処理には関わらないので文脈には特に関与しない。¹ 語用論的な処理を行う文脈は、いずれも談話記憶に置かれる。談話記憶は有限の記憶領域で無制限に文脈情報を収蔵しておくことはできないが、記憶しておく情報の形式を変容させることで保持しやすくするしくみはある。談話記憶に置かれる文脈は、(A) 形式文脈、(B) 状況文脈、(C) 知識文脈、(D) 二次文脈の4種類であるが、会話の場で言語化されたもの（発話）を集積する(A) 形式文脈と、会話の場で言語化される以外の情報を抽出・集積する(B) 状況文脈は外的刺激を文脈にしたものである。

知識記憶には、身体的記憶を除けば、陳述的記憶のみがあり、その下位区分として言語知識と世界知識が半永久的に収蔵されている。身体的記憶は言語を介さずに収蔵している

¹ ここでの処理記憶の機能は、音声言語に対する即時処理を想定している。文字言語を読む場合、通常、音韻・形態などのレベルではほぼ処理は済んでおり、統語や意味のレベルでも一部処理が済んでいると考えられるが、音声言語とは異なる処理が「読む」という作業では必要になることも考えられる。

もので、泳ぎ方や自転車の乗り方、あるいは踊り方などの手続き的記憶に相当する。身体的記憶は言語を介さない記憶情報ではあるが、これを言語化することは不可能ではなく、言語をプライミングやキューとして使うこともできる。² 世界知識は、その取得経路により2種類に下位区分され、話者個人が直接体験したできごとやその解釈たる「できごと記憶」と既に情報や知識として一定の解釈を含むものを間接的に他者（書籍なども広く含む）から取得した「学習記憶」を想定する（加藤 2017a: 89）。

知識記憶のなかにある世界知識は概ね整合性・合理性をもって体系をなしているが、そこから活性化されて談話記憶のなかに文脈として写像的に転送されたものが（C）知識文脈である。「写像的な転送」とは、いわば知識記憶内の世界知識の一部が談話記憶内に転送されても、知識記憶から転送されたものが消えるわけではなく、そのまま保持されており、いわば複製されるように談話記憶内にも保持されて、一時的に二重に存在していることを踏まえている。談話記憶は有限なので、新しい文脈情報が置かれるとそのままの質と量で保持するのは難しく、徐々に減衰してしまうこともある。しかし、世界知識に含まれているオリジナルの情報の方はほぼ減衰しない永続的なものである。しかし、談話記憶内の新しい文脈情報によって更新が必要になれば、世界知識の情報は修正や変更・強化・削除などの方法で更新される。談話記憶内で生じる修正などの更新は、世界知識の更新が必要にならない限り知識記憶には波及しない。

例えば、会話分析で言うトラブルは、おおむね聞き間違いや言い間違いなどの形式文脈における不備や、指示や照応の誤解釈、表現の意味解釈の取り違いなどを想定していることが多いが、これらはほぼ談話記憶内の訂正や更新で済む。

- (6) A1「次の交差点を右ね」 B1「右ですか」 A2「あ、ごめん。左だった、左」
B2「じゃ左折しますね。よかった。右折禁止の交差点だったんで」
- (7) A1「じゃ、三階^{サンカイ}に行きましようか」 B1「サンカイ、じゃなくて、サンガイ、でしょ」 A1「えっ？ みんなサンカイって言ってますよね」 B2「本当はサンガイが正しいの。辞書引いてご覧なさい」 A3「そうなんすか」
- (8) A1「K先輩に頼んで手伝ってもらってもいいでしょうか」 B1「ええと、K君は子供の世話で忙しくてきてくれないと思うよ」 A2「えっ？ Kさんは独身じゃありませんでしたか」 B2「K君は去年結婚して最近お子さんが生まれたんだって。私もつい先日聞いたんだけど」

² 例えば、自転車の乗り方やそば打ちのやり方をことばで説明することは不可能ではないが、ことばで必要な情報を余すことなく表示しようとするとうまく伝わらないこともある。現場での実技指導であれば、言語以外の情報で示せることは少なくない。また、踊りを不完全にしか記憶（手続き的記憶にあたる）していない人に対して、「右手、左足、ターン…」のようにプライマーとなることばを示すだけで適切に処理できることもある。

(6) では、運転者 (B) への指示を間違えたことに A が自ら気づいて A2 において自己修復しているが、B は運転ルートをあらかじめ知っていて世界知識に収蔵しているわけではなく、世界知識の更新は生じない。談話記憶の情報さえ更新しておけば問題のない例である。もちろん、このできごと (A の指示間違い・言い間違い) を B が経験したできごととして記憶すれば、世界知識にできごと記憶として取り込まれることになる。(7) は、A1 の読み・発音について B1 が教育的に訂正を示している。A1 の「サンカイ」という読み・発音は、知識記憶のなかの言語知識に由来しているので、必要があれば A は言語知識の訂正・更新を行うことは考えられる (どのようなやり方で更新すれば、新しい情報が定着するのかについては言語習得上、興味深いのが、本論のテーマを逸脱するので、ここでは扱わない)。(8) では、先輩の K に子供がいることを知らず、A2 で独身だという自分の知識の正否を尋ねている。B2 によって示された情報によって、談話記憶における知識文脈を訂正することになるが、通常は、その元になっている世界知識の更新が必要になる。

以上、談話記憶内の知識文脈でのみ情報の訂正がなされる例、知識文脈における言語知識の訂正・更新が想定される例、談話記憶内の知識文脈での情報の訂正が知識記憶における世界知識の更新にまで及ぶ例、を順に見た。

世界知識がそのまま情報として直接参照されないのは、世界知識は個人の生活史における全経験と全学習に関する記憶であり、その収蔵量があまりにも膨大だからである。収蔵されている記憶があってもすべてがいつでも使える状態 (= 活性状態) にあるわけではなく、引き出そうとしてもすぐに引き出せないこともある。この引き出しの失行はいわゆるど忘れと呼ばれる現象であるが、あまりアクセスしない記憶の場合、細部が減衰していたり、すぐには細かな情報が引き出せなかったりすることは誰しも経験するところだろう。知識記憶内に収蔵されていても、必ずしもアクセスできないケースを考えに入れると、引き出して談話記憶に転送してすぐに活用できる状態 (= 活性状態) にあるものと、知識記憶の中にあるが転送されずに活用できない状態 (= 不活性状態) にあるものとを区別して置くことで、統合的な処理が可能になる。なお、談話記憶内に置かれる (A) 形式文脈・(B) 状況文脈・(C) 知識文脈は、原則として活性状態にあり、これらの文脈情報 (複数を組み合わせてもよい) から推論によって得られる想定が (D) 二次文脈である。

ここで考えたいのは、いかにして世界知識から必要な情報が活性化 (= 談話文脈への転送) されるのか、ということである。

2. 副助詞の語用論的機能

本節では、副助詞の機能について論じる。1.1 節で見た主題性と対照性は、従来日本語の文法論で議論されてきた2つの特質である。松下 (1930) の言う「分説性」は両者に通

底する特質とみることもできるが、ここでは、主題と対照という観点で記述する方法を考える。主題が非焦点で、対照が焦点だと単純に仮定すれば、表1における②対照用法は非主題なので焦点であり、③主題用法は非対照なので焦点ではなく、前提ということになる。問題は、①対照的主题である。対照であり、主題でもあるとすれば、焦点であり非焦点でもあることになり、矛盾してしまう。対照性があることを焦点たる資格とすれば、①も焦点であり、②も焦点と扱うことになる。②も③も主題であるが、前者は焦点性を持つが、後者は焦点性を持たないと考えることはできる。この「焦点」は「前提」と対をなす文法論的な概念である。

2.1. 焦点のタイプ

Miller (2006: 512) では、平行焦点・置換焦点・制限焦点・拡張焦点・選択焦点といったタイプをあげている。以下に論点だけを表にして掲げる。

平行焦点 (Parallel focus)	A と B がある。A は … だが、B は～だ。
置換焦点 (Replacing focus)	A だ。いや、B だ。
制限焦点 (Restricting focus)	A と B だ。いや、A だ。
拡張焦点 (Expanding focus)	A だ。いや、A と B だ。
選択焦点 (Selecting focus)	A か B か？ A だ。

表2：Miller (2006) による焦点の5タイプ

いずれも、第1文で新規に導入され、それが第2文で異なる扱いを受けている。すなわち、第1文におけるAあるいはAとBは焦点であるが、既出を非焦点とすると、第2文に再出するAあるいはBは非焦点(=前提)ということになる。

これを第1文・第2文(あるいは冒頭文・後続文)における焦点性の有無は、以下の表3のように記述することができるだろう。もちろん、これは機械的な記述で、別の処理を行うことも可能である。(なお、焦点・非焦点における1は第1文・冒頭文を、2は第2文・後続文を指している。)

種別		焦点	非焦点
平行焦点	A と B がある。A は … だが、B は～だ。	1-A, 1-B	2-A, 2-B
置換焦点	A だ。いや、B だ。	1-A, 2-B	
制限焦点	A と B だ。いや、A だ。	1-A, 1-B	2-A
拡張焦点	A だ。いや、A と B だ。	1-A, 2-B	2-A
選択焦点	A か B か？ A だ。	1-A, 1-B	2-A

表3：Miller (2006) による焦点の5タイプにおける焦点性

既出で既知なら焦点でないとするなら、表3ようになるが、実際は、それほど単純

でないところもある。例えば、拡張焦点と言われるタイプの場合、(10)では、第1文で焦点として導入された「太郎」が第2文では前提として扱われ、拡張のため第2文で追加した「次郎」はいわゆる累加の副助詞「も」でマークされ、焦点として扱われている。これは表3の通りである。しかし、(9)では第1文で「太郎」が焦点として導入され、第2文では「太郎と次郎」が焦点の扱いを受けている。これらでの「が」の用法はいわゆる総記と見ることができ、他を排して強調しているということもできる。第2文では「太郎」ではなく「太郎と次郎」を焦点化しており、「太郎と次郎」のなかの「太郎」が既出だから焦点から外れると考えることもできそうだが、そうすると、選言や連言の名詞句は分解して焦点をあてはめることになって、不整合が生じる。この種の不整合は枠組みを整理し直せば、回避できるかもしれないが、本論では句につく副助詞が焦点・非焦点の標示とかかわると考えるので、句を焦点・非焦点に関して分断されるとは考えない。

- (9) 「明日の会議には、太郎が参加するんだよね？」 「いや、太郎と次郎が参加するんだよ」
- (10) 「明日の会議には、太郎が参加するんだよね？」 「うん、太郎は参加するけど、次郎も参加するんだよ」

上述のように「太郎」と「太郎と次郎」が焦点のステータスに関して異なると考えると、これは置換焦点と同じタイプになる。そして、拡張焦点と同じ原理が制限焦点にもあてはまる。

- (11) 「明日の会議には、太郎と次郎が参加するんだよね？」 「いや、太郎が参加するんだよ」
- (12) いや、太郎だけが参加するんだよ。
- (13) いや、参加するのは太郎だけだよ。

つまり、(11)の第1文「太郎と次郎」も第2文「太郎」も焦点である。このことは、第2文を(13)のように分裂文に変えることが可能なことでも確かめられる。(11)の第2文は(12)のように「だけ」を付した方が自然になる。このときの「だけ」は焦点の削減あるいは制限を標示しているとみることもできるだろう。なお、分裂文の(13)でも「だけ」があるほうが自然で、なくても成立するが受容度はやや低下する。

また、Miller (2006)の平行焦点は、先に導入した連言句を分解して、対照しているので、いずれも焦点である。(14)を見ると、第2文の「太郎」と「次郎」は対照性のある主題で「は」で標示しているが、(15)のようにいずれも「が」による標示も可能である。

- (14) 明日の会議には太郎と次郎が参加する。太郎はA分科会に出て、次郎はB分科会に出る。

- (15) 明日の会議には太郎と次郎が参加する。太郎がA分科会に出て、次郎がB分科会に出る。

同じく置換焦点は、最初に導入した焦点が否定されて別の焦点が示されるので、いずれも焦点である。拡張焦点と制限焦点は、一部追加ないし一部削除であるが、最初の焦点がそのままではないので、上記のように新しい焦点の導入と見ることもできる。

選択焦点は、第1文で選択肢となる複数の候補を焦点として示しているが、これは選言的關係（つまり、A or B）にある焦点に対して、特定された焦点（たとえば、A）を第2文で決めて導入すると見ることもできる。とすれば、表4のように整理し直すことができ、焦点がそのまま主題化されるのでなければ、既知性は保証されないので、多少の焦点性があると見るべきだろう。

種別			焦点
展開	平行焦点	AとBがある。Aは…だが、Bは～だ。	A&B, A, B
修正	置換焦点	Aだ。いや、Bだ。	A, B
	制限焦点	AとBだ。いや、Aだ。	A&B, A
	拡張焦点	Aだ。いや、AとBだ。	A, A&B
確定	選択焦点	AかBか？ Aだ。	A or B, A

表4：焦点タイプの再整理

第1文で現れた未知の句が焦点として導入され、第2文以降の後続文でそれが対照性を持つことなくそのまま主題として継承されれば非焦点と扱われる。例えば、(16)の「花子」は第1文では焦点性があるが、第2文では非焦点の主題である。(17)の「花子」は第2文で初出だが、第1文の「教え子」に含まれるから、まったくの未知ではない。(16)第2文の「花子」の焦点性はないか低いが、(17)第2文の「花子」は多少の焦点性を持っている。

- (16) 山田先生の教え子には花子がいる。花子は優秀だ。
 (17) 山田先生には教え子が数名いる。中でも花子は優秀だ。
 (18) 山田先生の教え子には花子と葉子がいる。花子は優秀だが、葉子はあまり優秀でない。
 (19) 山田先生の教え子には花子と葉子がいる。花子は優秀だが、葉子{も/*は}優秀だ。

表4の「展開」は、「花子と葉子」を第1文で導入し、第2文では「花子」と「葉子」に分けて対照している。(18)の第2文では、いずれも多少の焦点性を持つ主題になっているということができよう。(19)は、いずれも「優秀だ」のようになれば対比されない

ので、「は」は使えない。「葉子も優秀だ」は「優秀なのは葉子もだ」という分裂文では据わりが悪いが、置き換えることは可能だろう。「優秀なのは葉子も同じだ」という分裂文で置き換える方が自然だが、このことは「優秀だ」がここでは前提化され、「葉子も同じだ」が焦点になっていると解釈できる。とすれば、「葉子も優秀だ」の焦点は「も」によって表示され、葉子について同一性が適用可能であることが焦点の実質だと言えるだろう。

2.2. トリガード標識としての副助詞

先行文脈にも登場していない要素が初出でありながら既知的な主題と見なされる例もある。いわゆる連想照応（坂原 1991、天野 1993、Matsumoto 1998、加藤 2003）と見ることが出来る例をあげる。

- (20) 昨日 X 区内で高齢の男性で殺害された。犯人 {は／*が} まだ逮捕されていない。
 (坂原 (1991) の例文を一部変更³)
- (21) 先週久しぶりに芝居を見に行った。今朝の朝刊によると、その劇場は昨日火災で焼失したようだ。
- (22) 駅前で大きな爆発事故があった。救急車は何台も来ていた。

(20) の「犯人」は先行する形式文脈に同一名詞句あるいは指示上同一となる名詞句がなく、初出の名詞句である。しかし、このとき「は」は使えても「が」ではひどく不自然となる。これで、「は」を既知、「が」を未知とする単純な二項対置が成立しないことは確認できる。(21) における「その劇場」は特定の劇場 (= 発話者が久しぶりに芝居を見に行った劇場) を指し、先行文脈にまったく現れない初出の名詞句なのに既知扱いになっている。(20) でも「犯人」を「その犯人」とすることが可能だ。(22) も「救急車」が初出でありながら既知名詞句のように扱われているが、これは「その救急車」とはできない。(21) (22) は「その劇場が」「救急車が」としても成立する。では、(23) ~ (26) はどうだろうか。

- (23) 駅前で大きな爆発事故があった。#報道ヘリは 2 機ほど来ていた。
- (24) 駅前で大きな爆発事故があった。#小学生は 3 人来ていた。
- (25) 駅前で大きな爆発事故があった。#犯人はまだ捕まっていない。
- (26) 駅前で大きな爆発事故があった。#パティシエは 2 人来ていた。

これらはいずれも「報道ヘリ」「小学生」「犯人」「パティシエ」が唐突で、不自然に感じ

³ 坂原 (1991: 66) の例文は「男が昨日道で殺された。殺人者 {は／*が} まだ逮捕されていない。」であるが、自然さを判断する上で、上記のように一部変更している。

られる。語用論的な問題があることを示す#は、統語構造上の問題でないことも同時に示しているが、不自然さや違和感、受容しにくさの度合いの違いは示していない。⁴

「駅前で」「大きな爆発事故が」発生したことから「救急車」を連想することはやすい。事故があれば負傷者が出る可能性があり、負傷者に対応するために救急車を呼ぶことは十分に考えられるからだ。これは Schank and Abelson (1977) でいういわゆるスクリプト的知識に近いところがあるが、もちろん場面によって会話をどう進めるかといったセリフ集や台本のようなものではない。ただ、「爆発事故」から「なにかの破損や崩壊」「人間の負傷」「火災の危険」「通信障害や渋滞といった副次的トラブル」、さらにこれらから「救急車」「消防車」「警察」などを想定することは、すでに多くの人間の世界知識のなかにある情報のネットワークによって容易である。

加藤 (2017a) ほかでは、従前のいわゆる長期記憶 (LTM) に想定する領域を「知識記憶」とし、そこに身体的・非言語的な知識としての「手続き記憶」と言語的な知識としての言語知識と世界知識を設定していることはすでに 1.2 節で確認したとおりである。従前の区分では、命題形式で収蔵されている宣言的記憶という概念も提案されていたが、命題の基準、文の多様な形式などを考慮に入れると、収蔵形式を命題とする規定にそれほど合理性はないことがわかる。ただし、収蔵されている記憶を外在化して (取り出して) 研究者が確認できるようにする上では命題形式でそろえることに重要な便宜性はある。

「爆発事故」から「破壊・崩壊」「負傷者」「火事」「警察」「消防車」「救急車」「報道関係者」などを (その連想の経路はここでは論じないが) 想定することは、ある種のできごとに関する、イベント的な情報ネットワークを利用しているが、これは爆発事故があっても負傷者が出ず、報道関係者も来ない事態が考えられるので、理解する上で引き出せる解釈ではあるもののその有効性が保証されず、無効化が可能である点で推意 (implicature) と共通する特質を持っている。

また、一般的なものと個別特殊なものに分けられる点も似ている。Grice (1975) 以降のグライス系の語用論 (Levinson 1983, 2000, Huang 2014² など) では、一般会話推意 (GCI: Generalized Conversational Implicature) と特殊会話推意 (PCI: Particularized Conversational Implicature) に二分しているが、これは、形式によって推意が得られ、あまり個別文脈による差異を生じない前者と個別文脈を優先して個別の特殊な推意が得られるとする後者の対立になっている。世界知識も一般性が高いものと特殊性が高いものにと

⁴ #と##、あるいは###によって受容しにくさの程度を表示し分けることは可能だが、この場合、表示し分ける全体の範囲が分かっているなければ、相対的な評価であっても正確な表示にならない。基準を決めて絶対評価をしても、無制限に#を増やせば正確な評価や記述にならず、恣意的な表示になってしまう。受容しにくさの違いについて分析者の判断を示すことは重要だが、恣意的であったり、説明が不十分であったりして、混乱を生じないように意を用いる必要がある。

連続的に区分できるが、これは GCI と PCI のような離散的対立ではなく、一般と特殊を両極とする連続的な軸の上に配列されるような情報群である。「駅前」といったときに大都市のターミナル駅などであれば、地下街やバスターミナルなどが近隣にあることが考えられるが、都市の郊外の駅であればその種の物はあまり考えなくてもよいだろう。また、特定の A 駅あるいは B 駅となれば、より具体的な情報がネットワーク的に引き出されることだろう。

より一般性の高い情報群は世界知識の中でも多くの人々が持っていて共有度が高いものであろうし、特殊個別な知識や情報群はあまり共有度が高いとは言えない。しかし、この共有度もどういう集団におけるものかで共有度は異なり、時代や社会状況によっても容易に変わるものである。A という国、B という地方、C 市、D 大学あるいは若者・年配者などさまざまな要因で共有度は変わりうる。空間的・時間的な変異のほかには社会属性による変異を想定することができる。

連想照応とよぶ現象の場合、先行詞と照応詞のような形式的な関係は見だしにくい。「太郎」と「彼」であれば照応詞は代名詞を中心とする指示表現であり、先行詞はおおむね先行する形式文脈に現れている。しかし、「芝居」と「劇場」は、先行詞と照応詞のような関係を持っていない。ただし、「芝居」の行われる「場所」として「劇場」は想定しやすい。あるできごとには関係する場所や時間、関与する人とその役割、関与するもの（加藤 2003 でいう随伴物を拡張して適用できる）などが世界知識の中ではネットワークをなしていると考えれば、「芝居見物」といったできごとのネットワークに「劇場」や「役者」「観客」「舞台」「照明」「作品」「チケット」などの関連する事象や事物があり、「芝居」をそれにかかわるネットワークを活性化するためのスイッチと見なすことができる。ここでは、スイッチの役割をする言語形式をきっかけとなり、引き金を引くことになる要素として、《世界知識におけるネットワーク活性化のトリガー (trigger)》と呼ぶ。このときのネットワークは、一般にできごと・イベント・動作・行為に関する知識の中で形成されているできごとのネットワークである。

芝居見物というネットワークはもちろん、頻繁に観劇に出かける人と、観劇にあまり行かない、あるいは関心がない人では当然ネットワークに関わる要素が異なる。頻繁に観劇する人ならもっとたくさんの要素が活性化できるかもしれないが、観劇をしない人は当然のことながら活性化される要素はずっと少ないだろう。

「爆発事故」という世界知識におけるネットワークでは、「破損」「負傷者」「火事」「警察」「消防車」「救急車」「報道関係者」「現場封鎖」「渋滞」などさまざまな要素が活性化されうるが、何が活性化されるかにはやはり個人差がある。「爆発事故」がトリガーとなって世界知識のネットワークが活性化されるとき、「救急車」は多くの人々が活性化するので (22) の受容度は高い。このとき、「爆発事故」は初出で焦点性のある情報だが、後続部にとってはできごとのネットワークに対する活性化のきっかけ (トリガー) になる。活性化

のきっかけを受けて「救急車」は活性化された情報であり、そのことをマークしているのが「は」である。つまり、「は」の一つの機能は、ネットワーク活性化のきっかけによって活性化された情報であることのマーキングであり、トリガー (triggered) の標識 (ここでは略してトリガー標識と言う) なのである。既知の情報は活性化済みであるが、それは形式文脈に既出であるか、発話状況においてすでに認知済みであるか (例えば、談話の冒頭で「私は・・・」と語り始めるのがその典型的な例にあたる)、のいずれかであるが、トリガー標識の「は」の場合も世界知識においてネットワーク的に活性化済みになっている点で同じステータスにあると言える。

「報道関係者・新聞記者・テレビカメラ」なども活性化される可能性は高いが、「報道へり」はそれほど活性化されるわけではないだろうから、違和感のある人は多くなり、(23)の受容度はやや低い。「爆発事故」が過失や経年劣化など意図的なものでなければ「犯人」はいないが、意図的に発生させられたものであれば「犯人」はいると考えられる。意図的に発生したのであれば「爆発事件」というべきであり、意図的な事件だと判断する根拠は十分ではないが、そう解釈する可能性は排除されていないので、やや受容度は低くなるが、ひどく不自然とまでは言えなくなる。「小学生」や「パティシエ」は、通常は「爆発事故」をトリガーにして活性化される情報とは考えにくく、自然ではないだろう。しかし、この時期は駅前の地下街の商店を多くの小学生が見学に訪れているとか、当該の駅の周辺にはたくさんの洋菓子店があるという情報を話者が持っていれば、それほど不自然にはならないかもしれない。

以上見たような世界知識でのネットワークで活性化が生じる認知過程は、語用論的なものである。では、語用論的な活性化のほかに意味論的な活性化があるのかについて次節で考える。

2.3. 活性化における意味論と語用論の境界

従来、「は」の主題性や対照性を論じる際には、文の論理や意味について頓着しないことが珍しくなかった。

- (27) 春は曙だ。
- (28) 春は曙が情趣のある時間だ。
- (29) 春は曙が情趣のある時間だ。夏は夜が情趣のある時間だ。秋は夕暮れが情趣のある時間だ。冬は早朝が情趣のある時間だ。

例えば (27) はよく知られた古典の文章から取った例文にコンピュータを追加して現代語の例文らしくしたものであるが、これは一種のウナギ文であって、通常と同定文ではない。本来であれば、(28) のようにでもすると例文の論理を理解する解釈上の負担を考えなくてもよくなるのであるが、もちろん、例文に趣はなくなる。ここではやむを得ず趣ないま

まに考える。(28)における「春は」は主題であるが、既出ではないので、対照性のない主題である(1.1節における③)。しかし、(29)では、「春は」「夏は」がともに対照性のある主題として配置されている。(28)と(29)を比較すると、対照性のない主題とある主題として区別することができるが、では、(28)のあとに「夏は…」と続けるとその瞬間に対照性が発生するのであろうか。(27)(28)が対照性の有無で対立するのは、発話の全体が終わった時点で判断しているからであるが、これはいわゆる静的な捉え方であって、会話参加者の視点で動的に捉えるなら、対照性やそれと連動する焦点性は常に変動すると本論は考える(ここでは詳論しないが、これは加藤 2017a, 2020 でいう動的語用論・演繹的文脈の枠組みを基盤としている)。つまり、(28)のままでは対照性があるとは言えないが、(29)において第2文を話者が発した瞬間に明確な対照性が生じると見ることができ、発話の途中でその対照性が高まり、連動して焦点性が高まることになる。発話の中で対照性や焦点性は変動すると考えるのである。

もう一つ関連して明らかにしておくべき問題がある。(29)は第4文まで発話すればもちろん、第2文で「夏は」が出た時点で対照性が生じることは形式的に確認できるが、では、(28)の段階ではまったく最初から対照性や焦点性がないのかということである。「春」は季節を表す名詞の一つであり、一般には「春」があれば「夏」「秋」「冬」が連想的に想起できる。ただ、これは前節で見たようなできごとの的なネットワークとは異なり、ことばの知識として「春・夏・秋・冬」が「季節」というカテゴリーをなし、意味論的には共下位語の関係にあること、上位概念として「季節」や「四季」があることなどを考え合わせると、言語知識と見することもできる。「曜日」や「(一年を構成する12の)月」などは明示的なカテゴリーをなし、また、その共下位語は一般に有限である。このように、共下位語や上位語と下位語、対義語と類義語の関係にあることばは、語のレベルで意味論的な関係性を有し、言語知識、とりわけ語彙体系あるいは辞書の知識の一部となっている。先に1.2節で確認した知識記憶のなかには世界知識と言語知識が一応分離して収蔵されることになっており、できごとの的なネットワーク意味は世界知識に含まれるが、意味論的な語彙体系は言語知識に含まれるとするのが一般的だろう。意味論的な語彙体系は、その言語の知識を共有する言語使用者のあいだでは共通していることが多い点も、世界知識とは異なる。

(30) 太郎は学会に行くそうさ。花子は学会には行かないそうさ。

(31) 三郎は、ビールは飲まない。

形式上は、意味論的な語彙体系と似ているが、関わる言語形式の関係が意味論的とは言えないのが、(30)である。「太郎」は「花子」と対照関係にあるが、多くの場合、「太郎」と誰が同じようなカテゴリーにあるのか、「太郎」以外にそのカテゴリーに含まれるメンバーの数もわからない。話者の中では、当該の学会に行く可能性のある関係者として想定

しているメンバーはいるのかもしれないが、それはかなり特異な世界知識である。(31)における「ビール」は他のアルコール飲料との対比が想定されるものの、上位概念としての「アルコール飲料」は推定できても、そのなかのどのような飲み物と対照しているのかは特定できない。(30)の「太郎」「花子」のような対照は人間であることは容易に想定できるが、その具体的な集合の範囲や定義は容易に確定しないもので、意味論的な言語知識ではない。一方、(31)では「アルコール飲料」といった上位概念とその下位概念としての「ビール」までは特定でき、その共下位語についても、意味論的な言語知識として扱うことはできるだろう。しかし、(31)でもどのような共下位語が想定されるかは特定できない。これは、「アルコール飲料」という概念の含む下位概念・下位語が有限ではないからだ。「Xは食べない」というとき、「X以外は食べる」ということが想定されているのであれば、これは上位概念を想定しつつも、当該の要素とそれ以外からなる補集合との対照であって、個別の要素間の対照ではない。しかし、これでも対照性は成立し、「ビール」がアルコール飲料あるいは炭酸飲料であるという程度の世界知識さえ参照できればよい。世界知識は無関係ではないものの、とりあえず、「Xと補集合」という推論処理さえできればよく、世界知識はそれほど深く関与しない。

「春」と「季節」という上位概念を想定する場合は、「季節」の含む共下位語が少なく、一般性の高い知識なので、対照性を引き出すことは容易である。これに対して、「関脇」に対する「幕内」の職階といった種別は人によって知識の差があることもあり、対照性の差には変異が想定される。上位概念と下位語の関係であるにしても、これらがすべて言語知識として同様に習得されているとは考えにくく、結局、語用論と意味論のあいだに単純な境界線は引けない。一般性が高く共有されている可能性が高いものは、意味論的なものであることが多いかもしれないが、言語知識としての語彙体系をなしていても世界知識の性質の強いものもある。トリガーによって活性化が容易な関係かどうかで捉えるのが現実的であろう。

とすれば「春は…」と語り始めた時点で対比される他の季節を想定することは容易なので、もともと焦点性は高く、補集合を想定しやすい場合も焦点性は高いということは言えるだろう。一般的な知識記憶かどうかをある程度文化的・言語的に定めることはできるだろうが、それはあくまで一般的な傾向であり、話し手と聞き手の間で特殊な知識記憶が共有されている場合は、いかに特殊であっても、説明や補足抜きで解釈が容易になる。これはいわゆる共通基盤 (Stalnaker 1972 など) の問題だとも言える。

3. 文脈逆成と活性化

前節までに論じたように、「は」は知識記憶の情報から活性化がなされていることを示す標識と見ることができる。このなかでも、いわゆる①形式文脈における既出による既知

句につくのは、従来の旧情報・前提にあたる名詞句などにつく「は」の用法である。(32)の後に続く(33)であれば直前の形式文脈(32)に「男」があり、(33)の「男」は初出ではなく、同一の指示を行っている。(33)の「男」は「その男」としたり、「彼」としたりでき、形式文脈内に指示対象を持つ照応とすることも可能だ。

しかし、(33)は(32)のような先行文脈なしでも成立し、指示対象が確定している既知名詞句としての扱いを受ける。つまり、(33)から始まる談話・テキストがあっても不適格にならないのであるが、これは「既知」でない(=「未知」な)のに「既知」として理解し、成立するという不思議な状態である。

(32) 開けっばなしのドアから男が部屋に入ってきた。

(33) 男はゆっくりと椅子に腰を下ろした。

これはやはり①既知句とは異なるので、②(未知句でありながら)既知句扱い、として区分したい。加藤(2017a)では詳述していないが、発話から文脈が逆生成されると見るべき状況に触れ、文脈逆成あるいは文脈創成と呼んでいる。文脈情報が与えられていなくとも発話を不適格としないのは、日常的に私たちが経験する言語活動が常に順次適切に情報を蓄積していく理想的なものだけとは限らないからだろう。例えば、友人AとBが話している場面に出くわしたCが会話に途中から加わるときには、最初の時点で不足する文脈情報があることは十分想定される。しかし、Cが「それ」や「男」などの指示対象がわからないからといってAとBの会話は成立しないわけではなく、すでに成立しているのであって、Cが文脈を共有していないだけである。会話のやりとりがすでに成立していれば、会話参加者は形式文脈を共有しており、状況文脈もおおむね共有しているはずだ。知識文脈は個々人の世界知識は異なり、活性化(=知識記憶から談話記憶への写像的転送、1.2節を参照)も同一ではないが、同じ状況にあれば共有される度合いは高い。これは、会話参加者は、相互に解釈可能で妥当な発話を行うという信頼をもっている(加藤2011)ことから、不足する文脈は可能な限り補充したり再構成したりして発話の解釈を行うのである。

このような文脈逆成を行うことで、②既知句扱いは可能になるが、重要なのは(33)における「男」を既知句扱いして解釈を行う際に、「男」によって指示される人物がいて発話者はその人物が特定できていることは了解しているが、聞き手としてのわれわれはその人物の指示対象はわからないまま(いわば空項のまま)発話解釈を行っているということである。関連性理論では、指示の一義化などをして表意が確定し、文脈想定などと合わせて推意を引き出すプロセスを想定するが、指示が空項のまま発話を行うのであれば、表意が確定しないままやりとりをしていることになる。

4. まとめと今後の課題

前節まで確認した「は」の用法は、非焦点（既知・前提）と焦点（対照・未知）とに分けると以下のようにまとめることができる。

非焦点	①	既知句の標示
	②	既知句扱いの標示
焦点	③	世界知識におけるトリガード標示
	④	言語知識におけるトリガード標示

表5：焦点に関する「は」の用法区分

これらはいずれも談話記憶に活性化された情報として導入されている点では共通しているが、やはり情報構造上の濃淡がある。③と④は便宜上分けているが、単純に③のみ、あるいは④のみとできないものもあり、③と④の両方にまたがるような例を想定すべき場合があることはすでに2.3節で述べたとおりである。本論で言う世界知識は認知言語学で言う *encyclopedic knowledge* に概ね近いが、Langacker (1987) をはじめとする認知言語学の方向性を参考に、語用論と意味論の境界領域について再考する余地はあるだろう。

また、本論は「副助詞」といいながら「は」しか論じていない。松下は分説の「は」のほか、合説の「も」と単説のゼロ助詞も一緒に論じている。他の副助詞のなかには、やや特性の異なるものが混じっているので、一律に同じ基準で論じられないが、「は」と「も」とゼロ助詞は完全な範列関係性を有し、同一のロットに対していずれかしか選択できない。加藤 (2003) などではゼロ助詞が脱焦点化機能 (*defocusing function*) を持つとしているが、本論での議論との整合性を含め、論じるべきことはいくつかある。当然のことながら、「が」とゼロ助詞も別途分析し、3種の副助詞の違いを論じる必要がある。

「は」の提題用法は命題に一つ以下しか存在できないが、対照用法の「は」は一命題に複数存在できる。これは一種の多焦点 (*multi foci*) の文となる。しかし、本論では多焦点現象まで論じる余裕がなかった。多焦点は、「も」に関しても見られるの、合わせて比較しながら考察しなければならない。以上のことは機会を改めて論じることをお許し願いたい。

参照論文

- 天野みどり. 1993. 「文脈照応「その」の名詞解釈に果たす役割」小松英雄博士退官記念日本語学論集編集委員会 (編) 『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂、764-752.
- Bolinger, Dwight. 1961. "Contrastive Accent and Contrastive Stress." *Language* 37, 83-96.
- Culpeper, Jonathan and Michael Haugh. 2014. *Pragmatics and the English Language*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.

- Grice, H. Paul. 1975. "Logic and Conversation." In Cole Morgan (ed.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press.
- Grice, H. Paul. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Huang, Yan. 2007, 2014². *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.
- 加藤重広. 2003. 『日本語修飾構造の語用論的研究』東京：ひつじ書房.
- 加藤重広. 2008. 「記憶モデルと動的文脈の枠組み」、『日本語用論学会第 10 回大会発表論文集』3、363-366.
- 加藤重広. 2009. 「動的文脈論再考」、『北海道大学大学院文学研究科紀要』128、195-223.
- 加藤重広. 2011. 「世界知識と解釈的文脈の理論」、『北海道大学大学院文学研究科紀要』134、69-96
- 加藤重広. 2012. 「コンテキストと前提」、澤田治美編『ひつじ意味論講座 6』、39-62、東京：ひつじ書房.
- 加藤重広. 2016a. 「総説」、加藤・滝浦（編）『語用論研究法ハンドブック』、1-47、東京：ひつじ書房.
- 加藤重広. 2016b. 「統語語用論」、加藤・滝浦（編）『語用論研究法ハンドブック』、159-185、東京：ひつじ書房.
- 加藤重広. 2017a. 「文脈の科学としての語用論—演繹的文脈と線条性」『語用論研究』18、78-101.
- 加藤重広. 2017b. 「日本語副助詞の統語語用論的分析」、加藤・滝浦（編）『日本語語用論フォーラム』2、1-46、東京：ひつじ書房.
- 加藤重広. 2020 予定. 「心理的文脈と前提に関する動的語用論的研究」、田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）『動的語用論の構築へ向けて 第 2 巻』、240-264、東京：開拓社.
- Lambrecht, Knud. 1994. *Information Structure: Topic, Focus and the Mental Representations of Discourse Referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. 1983. *The Foundations of Cognitive Grammar; vol. 1, Theoretical Prerequisites*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
- Levinson, Stephen C. 2000. *Presumptive Meanings*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson. 1976. "Subject and Topic: A New Typology of Language." In Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*, 457-489. New York: Academic Press.
- Matsumoto, Yoshiko. 1998. "Is It Really a Topic that Is Relativized?: Arguments from Japanese." *Proceedings of the 27th Regional Meetings of the Chicago Linguistic Society, Part One: The General Session*, 388-402. Chicago Linguistic Society.
- 松下大三郎. 1930. 『改選標準日本文法』中文館.
- Miller, Jim. 2006. "Focus in Spoken Discourse." In Keith Brown (ed.) *Encyclopedia of Language and Linguistics (2nd edition)*, 511-518. Oxford: Elsevier.

- 坂原茂. 1991. 「フランス語と日本語の限定表現の対応」『平成3年度筑波大学学内プロジェクトによる助成研究(B) 研究成果報告書』、51-92、筑波大学つくば言語文化フォーラム.
- Schank, R. and R. P. Abelson. 1977. *Scripts, Plans, Goals and Understanding: An Inquiry into Human Knowledge*. Hillsdale: Erlbaum.
- Sperber, Dan and Dierdre Wilson. 1986, 1995². *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Stalnaker, Robert C. 1972. "Pragmatics." In Nicholas Rescher (ed.) *Studies in Logical Theory*, 98-112. Oxford: Blackwell.